**「悪人に手向かってはいけない」**

**仙台教区・平和を求めるミサ（16.8.7）**

**核兵器なき世界を目指して**

いきなり、新聞記事の引用をさせていただきます。それは、去る8月2日の『河北新報』の夕刊に記載された反核団体共同代表の森滝春子さん（77）の「核廃絶へーわたしの思い」の次のような少し長い抜粋であります。

　**「『空から死が落ちてきた』のではない。米国が広島に原爆を投下したのだ。オバマ米大統領が5月、広島で行った演説は主語がなく、あの日の悲惨な現状があたかも自然現象であるかのような言葉で始まり、白けさせられた。**

**原爆投下を正当化する米保守層を意識すればしかたがないという意見もあるが、なぜわれわれがアメリカの世論におもんばかる必要があるのか。・・・**

**2009年のプラハでの演説と同様、オバマ氏は広島で『核兵器なき世界』を訴えたが、抽象的で意味のないものだった。・・・**

**オバマ氏訪問を実現するために、日本政府は謝罪を求めないことを明確にした。・・・**

**なぜ、謝罪が必要なのか。恨みからではない。米国が『原爆投下は誤りだった』と認めない限り、再び核兵器が使われかねないからだ。死者に代わり、わたしたちには、核を廃絶する義務がある。そのためにも、謝罪を求めるという原点に戻らなければならない。・・・」**

実は、昨日、第71回広島平和祈念式典が行われた同じ会場で、丁度35年前の1981年2月25日に聖ヨハネ・パウロ二世は、全世界に向けて教皇「平和アピール」を力強く宣言されました。その同じ年の5月に開かれた司教協議会定例総会で、『平和と現代の日本カトリック教会―教皇「平和アピール」に応えて』の発表を決定したのであります。

　年が明けた5月の司教協議会定例総会で、**8月６日から15日までを日本カトリック平和旬間とすること**を定めたのであります。ですから、仙台教区では、旬間中に、この「2016　仙台教区・平和を求めるミサ」を、一斉にささげているのであります。

**過去を振り返ることは将来に対する責任を担うこと**

　間もなく第71回目の終戦記念日を迎えるに当たって、日本の教会は、平和実現に向かって何をなすべきか、真剣に検討し、実行に移す責任があるのではないでしょうか。それこそ、貴重な戦争体験を風化させないためにも、まさに、みことばを原点にして、着実に努力を積み重ねなければなりません。

　聖ヨハネ・パウロ二世は、その平和アピールの冒頭で、日本語に次いで英語で次のように強調なさいました。

　**「、わたしは深い思いに、『平和の巡礼者』として、この地にまいり、強烈な感動を覚えています。わたしがこの広島平和公園への訪問を希望したのは、過去を振り返ることは将来に対する責任を担うことだ、という強い確信を抱いているからです。」**

過去を水に流してしまうのではなく、過ぎ去った出来事を謙虚に反省し、二度と同じ過ちを繰り返さないという決意を新にすべきではないでしょうか。

　ところで、今の日本は、一体どの方向に向かおうとしているのでしょうか。先日も、名掛丁の東二番町のかどで、学生の右よりの団体のメンバーが憲法改正を訴えていました。戦後、70年以上一度も戦争を起こさなかったのは、平和憲法のお陰ではないですか。それを変えてしまうことは、まさに戦争をする国に根本的に変えてしまう危険が大いにあると言わざるを得ません。

**悪人に手向かうな**

イエスご自身、の福音ではっきりと断言しておられます。

　**「悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右のを打つなら、左のをも向けなさい。」**と。

　実は、この聖句を読んだ、たまたまロンドンに留学中のガンディが、親友のドウクにこのように語っております。

　**「本当にわたしを、受動的抵抗（非暴力による抵抗）の正しさと価値に目覚めさせてくれたのは、『新約聖書』でした。たとえば『悪人に手向かってはならない。だれかがあなたの右の頬を打つなら、左の頬をも向けなさい』とか、『あなたの敵を愛し、自分を迫害する者のために祈りなさい』と言った聖句を読んで、わたしは嬉しくてたまりませんでした。」**と**。**

インドの父と崇められたヒンドゥ教徒のガンディこそが、イエスの教えに最も忠実に従い、**非暴力**を実践したのであります。しかしながら、教会の歴史を振り返るならば、キリスト教徒がイエスのこの尊い教えに逆らって戦争を起こし、また戦争に加担して来たのは何故でしょうか。今こそ、謙虚に過去を振り返るべきです。

ちなみに、先週ポーランドのクラクフで開かれた「世界青年の日」を主宰

された教皇フランシスコは、その合間をぬって、アウシュビッツ強制収容所跡を訪問し犠牲者に祈りをささげ、また生存者たちとも面会なさいました。

　実は、第二次世界大戦当時の教皇ピオ十二世がナチスに対して「沈黙」を保ち、「ホロコースト（ユダヤ人の大量虐殺）を非難しなかった」として批判されてきましたが、このことについて教皇フランシスコは一切触れませんでしたが、には、**「主よ、これほどの残酷さを許したまえ」**と記帳なさったそうです。しかも、その訪問後、「虐殺はアウシュビッツで終わったわけではない」と語り、テロや迫害、紛争が絶えない世界の現状に警鐘を鳴らされたのであります。

　ですから、30日の大集会では、全世界から集まった100万人の若者たちに

向かって次のように訴えられました。「快適なソファを幸福と勘違いするのは悪性まひ」と現代社会の物質主義に苦言を呈し、『カウチ・ポテト族』（自宅のソファにごろごろと横になってポテトチップなどをかじりながらテレビを観て過ごす輩）ではなく、ブーツを履き「足跡を残すように」と呼びかけられました。とにかく、そのような教皇フランシスコの念頭には、恐らくキリスト教国が二度にわたる世界大戦や、大量虐殺を深い反省があったのではないでしょうか。

　ところで、この「世界青年の日」の巡礼にフランスから35000人の若者が向かったとき、ノルマンディ地方の都市Rouenの教会で、ミサをささげていたご高齢の司祭が、二人のISに関係する若者に惨殺されました。その事件を知らされた教皇フランシスコは、即座に次のように応えられたそうです。

　「今や、世界は戦争状態に入ってしまった。しかし、宗教戦争ではない。」と。

、このミサで祈るだけではなく、今日の世界における平和を脅かす様々な残酷な出来事を聖霊の光で検証し、平和実現のために具体的な一歩を踏み出すことが出来るように共に祈りましょう。